

高校・一般の部 優秀賞

石川 朝子

昭和19年7月、日本の委任統治領の要であったサイパン島の陥落を祖父に聞き、子供心に戦争の厳しさを知りました。その頃から容赦なく灯火管制下の卓袱台にも空襲警報が鳴り響いた。必至に防空壕へ駆け込むもB29の爆音に戦き、「もう駄目だ」と何度も思いました。やっと静けさが戻り防空壕を出ると、東の空に淡い光がゆらゆらと幾筋も伸び、後に横田飛行場から発信の「探照灯」と知りました。思えば戦争の真只中に見た不思議な夜空でした。戦局は愈々極み、六大都市を狙う無差別爆撃の不安の中がありました。そして3月10日の東京大空襲が下町を焰に包み、一夜にして家も町も壊滅させ、十万人の命が奪われました。又焰に煽られ、水を求め、折り重なるやうに隅田川に飛び込んだ尊い命に今も胸が悼みます。本郷の叔母一家も家を焼かれ、着のみ着の儘で我が家に疎開して来ました。戦後72年、あの戦争の惨禍は誰もが覚えておく大切な事実として、ずっと心に刻む必要があると思います。

戦なき七十路の日本桜東風 朝子